検証②　「学力向上，その先へ」
～学力の更なる定着に向けてできること～

県教委が児童生徒の学力向上を図るために推進している３本柱の取組が徹底され，学力調査の正答率が向上してきたことは，肯定的に評価されるべきことです。その上で，私たちが目指すべきことは，一人一人の児童生徒に，予測困難な未来社会を生き抜く力を身に付けさせることです。急激に変化する時代の中で，一人一人の児童生徒が，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるよう，その資質・能力を育成することが求められています。**そのためには，学力の３要素である，①「知識及び技能」，②「思考力，判断力，表現力等」，③「主体的に学習に取り組む態度」をバランスよく身に付けさせること**，すなわち，**確かな学力を定着させる**ことが重要です。

一方，学力調査等の数値で測ることができるのは，①「知識及び技能」，②「思考力，判断力，表現力等」が中心となります。しかし，社会が劇的に変化する時代においては，こうした数値で測りやすい知識等については，随時，更新が求められ，そのスピードは，過去と比較して著しく速くなってきています。こうした社会を生き抜くためには，粘り強く自らの学びを調整しながら生涯にわたって学び続けていこうとする態度，すなわち，「③主体的に学習に取り組む態度」を含む**「学びに向かう力，人間性等」（非認知能力）の育成についても大切に**していくことが重要です。

このような視点で本県とＡ県とを比較してみると，こうした**非認知能力に関わる項目について大きな差**があることが分かりました。また，**それぞれの項目については，学力とも強い相関**があることが分かっています。確かな学力の定着に近道はありません。**本県においても，「学力向上，その先へ」，もう一歩踏み出し，非認知能力を含めた確かな学力の定着に向けて，積極的に取り組んでいく必要**があります。

①　「自己調整（メタ認知）」

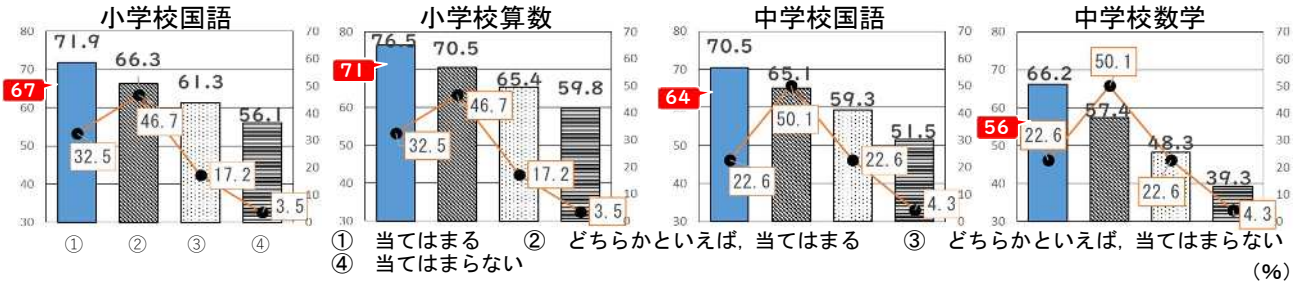
自己の学習を振り返って次の学習につなぐこと，いわゆる「自己調整（メタ認知）」ができる児童生徒は，学習のプロセスを上手にコントロールし，よりよい成果を挙げることができます。児童生徒質問紙と正答率との相関を見ると，**学習に関して「自己調整」ができていると捉えている児童生徒の方が，教科の平均正答率が顕著に高い傾向**が見られます。

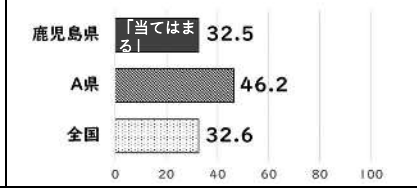
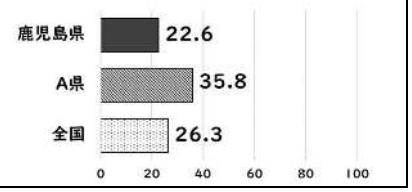
一方，児童生徒質問紙を見ると，本県で「当てはまる」と回答したのは，**小学校よりも中学校が少なくなっており，それぞれ，Ａ県とは非常に大きな開き**があります。また，学校質問紙からは，**授業での「見通し」と「振り返り」を計画的に取り入れている中学校の割合が全国に比べても低く**，こちらも**Ａ県とは約－３０ポイントと極めて大きな開き**があることが分かります。**より的確に自己調整を図れるようになるべき中学生が「自己調整」に関する意識が低くなっているのは憂慮すべき**状況であり，**受身でなく，主体的に学んでいく態度を育成するとともに，学び方等についても指導**していくことが求められます。

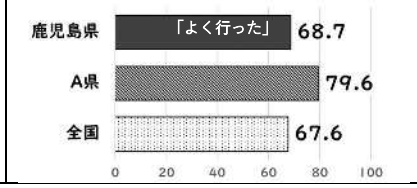
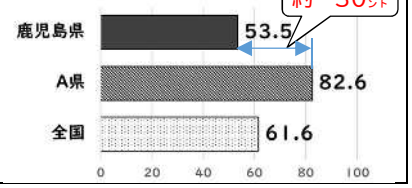
「自己調整」する力を高めるには，日々の授業において，ねらいを達成するためにどのような学習活動やまとめ方をするかなどの「見通し」をもたせた上で，授業内容の理解や

課題の遂行に対して，「どのように学習したから何が分かったのか」，「何が分からなかったのか」，「今後どうすればよいのか」などの視点で**「振り返り（自己評価）」を行うことが重要です**。自校において，**授業における「見通し」，「振り返り」が形式的なものとなっていないか，児童生徒にとって自分事のものとして意識され，習慣化されることを目指して行われているか**を検証する必要があります。

児童生徒質問紙　38	学習した内容について，分かった点や，よく分からなかった点を見直し，次の学習につなげることができていますか。



児童生徒質問紙　38	小学校	中学校
学習した内容について，分かった点や，よく分からなかった点を見直し，次の学習につなげることができていますか。		

学校質問紙　48	小学校	中学校
調査対象学年の児童生徒に対して，前年度までに，授業の中で目標（めあて・ねらい）を児童生徒に示し，授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れましたか。		

コラム　「何を」振り返らせる?

主体的に学習する態度を育てるために，授業の終末で，児童生徒に「振り返り」をさせることが大切です。その際，児童生徒の振り返りが，「楽しかった」，「難しかった」という感想のみで終わっていませんか？児童生徒に「振り返り」の視点を，しっかり示していますか？授業の終末では，児童生徒が自らの学びを「学習内容」「学習方法」の視点から振り返り，児童生徒同士でそれを共有することが大切です。児童生徒の「文章を短くすることの大切さを学んだ。」「次は時間を考えながら活動したい。」「〇〇の学習が新聞作りに活かされた。」「公式の導出方法を理解していなかったので問題を解けなかった。公式は暗記するのではなく意味まで理解することが大切だ。」などの振り返りを，教師が高く評価することで，自らの学習を調整しようとする態度を伸ばしていきましょう。

②　家庭学習

家庭学習には，**「量」**の観点と**「質」**の観点の双方からの検証が求められます。まず，「量」の観点について見てみると，一般的に認識されているとおり，今回の調査においても，**家庭学習の時間の長さが，教科の正答率に明確に影響**していることが明らかになりました。

家庭学習に取り組む時間として最も多い回答は，小・中学校ともに１時間以上２時間未満でした。１時間以上学習する小学生は約68%，２時間以上学習する中学生は約40%という状況でした。全国やＡ県と比較すると，小学校では１時間以上学習する小学生の割合はＡ県との差は約－４ポイントですが，全国平均は上回っています。また，２時間以上学習する中学生の割合は同じく全国を上回り，Ａ県との差は約＋８ポイントとなっています。

次に，「質」の観点に着目してみます。家庭学習は，自己調整（メタ認知）ができているかにより，その成果に大きな差が出るものです。家庭学習の時間を確保しているにもかかわらず，なかなか成果が上がらない児童生徒は，例えば，ノートにまとめること自体が目的になっていたり，学んだことが「できるようになっているか」という視点での取組が不十分であったりするなど，勉強している「つもり」にとどまっていることも考えられます。

本来，家庭学習は，「自分に足りないところは何か」，「そのためには何をどのように勉強すれば効率的・効果的に定着へとつながるか」をよく考えた上で取り組むべきものであり，こうした力は，社会に出てから新たなことを学んでいく際にも，当然に求められるものです。今から，家庭学習の仕方も含め，しっかりと身に付けさせておくことが重要です。

Ａ県では，学習塾や家庭教師の先生に教わっている割合が全国的に見ても大変低く，本県と比較しても低い状況にある中で，教師が児童生徒に家庭学習の具体的な方法を丁寧に指導することで，家庭学習の習慣化を図っています（コラム参照）。これにより，児童生徒が家庭学習に自律的に，かつ効果的に取り組んでいることが調査結果からもうかがえます。

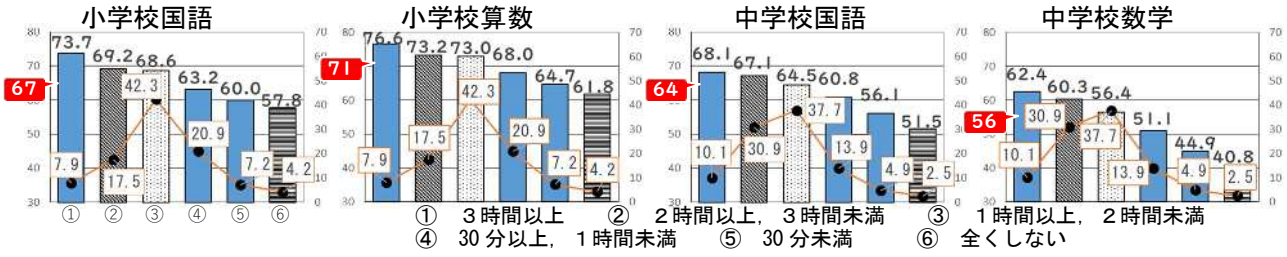
一方，本県で「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか」の問いに「よくしている」と回答した児童生徒の割合は全国平均を下回り，Ａ県との比較では顕著な差が見られるなど，計画的に家庭学習に取り組む習慣が身に付いていない児童生徒が多いことが分かりました。この項目については，正答率との強い相関も見られます。各学校においては，家庭学習の「量」の側面のみならず，「質」の確保の観点から，改めて家庭学習への取り組ませ方を振り返り，積極的に改善を図っていく必要があります。

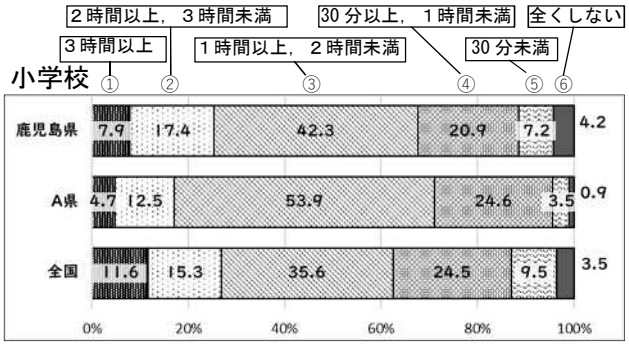
〔データ１〕

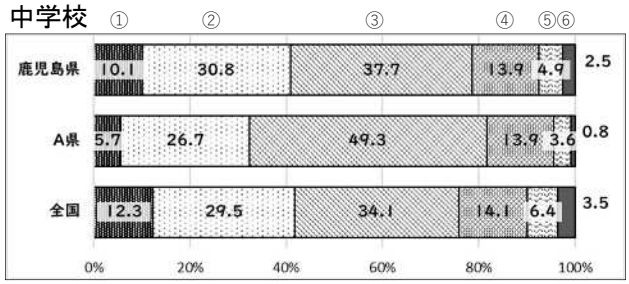
学校の授業時間以外に，普段（月曜日から金曜日），１日当たりの学習時間が長い児童生徒ほど，教科の平均正答率が高い傾向が見られます。

平日の学習時間が１時間以上の小学生及び２時間以上の中学生は，全国平均を上回っています。中学校に着目すると，Ａ県は１時間未満が 18.3%と本県よりも少ないですが，２時間以上で本県より－8.5 ポイント，３時間以上でも－4.4 ポイントとなっています。２時間未満のＡ県の中学生は 67.6%であり，本県よりも 8.6 ポイント多くなっています。家庭での学習時間を確保することについては，本県児童生徒の意識はおおむね高いと思われます。ただし，１時間未満の小学生は 32.3%，中学生は 21.3%であり，２時間未満の中学生が 59.0%もいることについては留意が必要です。

児童生徒質問紙　18	学校の授業時間以外に，普段（月曜日から金曜日），１日当たりどれくらいの時間，勉強をしますか







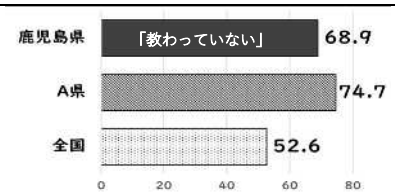
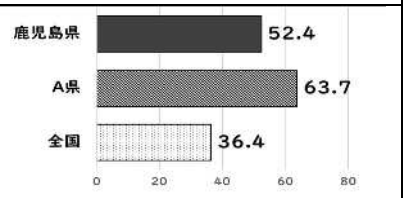
〔データ２〕

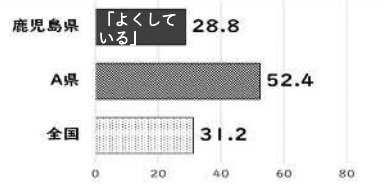
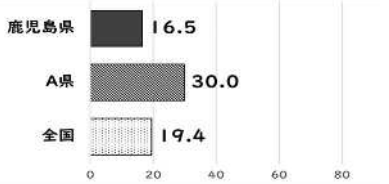
学習塾や家庭教師の先生に教わっていない割合は，本県もＡ県も全国平均を大幅に上回っており，多くの児童生徒の家庭学習が本人の自律的な取組に委ねられていることがうかがえます。そのような中で「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか」という問いに「よくしている」と回答した割合は，Ａ県より小学校で約－23.6 ポイント，中学校で約－13.5 ポイントも低い状況です。

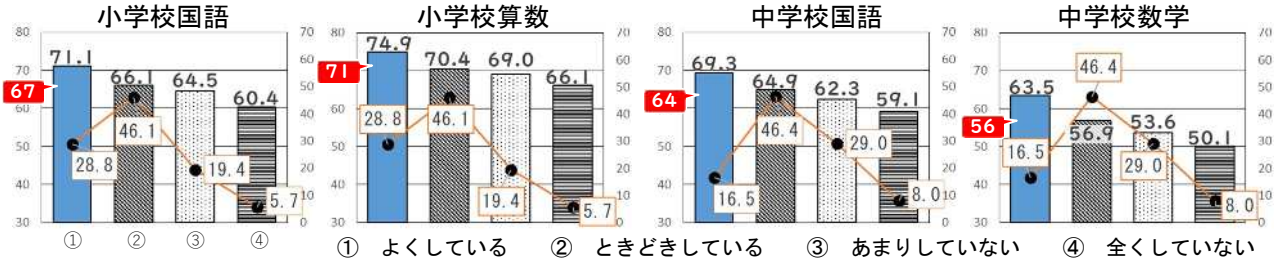
学校での指導に着目すると，「家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えるようにしましたか」という問いに「よく行った」と回答した割合は，Ａ県と比較して，小学校で－20 ポイント，中学校で－25.3 ポイントもの差があります。

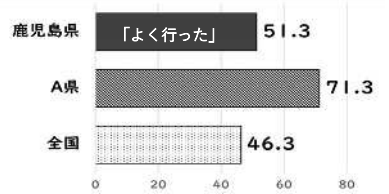
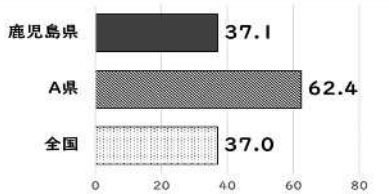
計画的な学習については，「よくしている」と回答した児童生徒の正答率が県平均を大きく上回っているなど，正答率とも強い相関が見られます。自校における家庭学習についての指導の在り方を改めて見直す必要があります。

（%）

児童生徒質問紙　20	小学校	中学校
学習塾の先生や家庭教師の先生に教わっていますか		

児童生徒質問紙　17	小学校	中学校
家で自分で計画を立てて勉強をしていますか（学校の授業の予習や復習を含む）		



学校質問紙　86	小学校	中学校
調査対象学年の生徒に対して，前年度までに，家庭学習の取組として，学校では，児童生徒に家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えるようにしましたか（教科共通）		

コラム　　A県の「家庭学習ノート」

学習塾の先生や家庭教師に「教わっていない」と答えた児童生徒の割合が高かったA県ですが，家庭学習はとても充実しています。それを実現しているのが，「家庭学習ノート」です。A県の家庭学習の進め方は，以下のとおりです。

① 先生の助言を受けながら，自分で計画を立てる。（復習・予習・発展的学習）
② 「家庭学習ノート」を使って家庭学習を行う（振り返りまで書かせる）。
③ 翌日，先生に提出し，先生のコメント（家庭学習の内容や方法，振り返り等の指導）をもらう。
④ 先生のコメントを励みに，家庭学習を改善する。

このように，先生が児童生徒に家庭学習の具体的な方法を丁寧に指導することで，質の高い家庭学習の習慣化を図り，高い学力を維持していると言えます。

③　自己肯定感

児童生徒が，「自分は先生や友達に認められている」「自分にはよいところがある」などの自己肯定感を感じていれば，安心して学びに集中することができ，その結果，学ぶおもしろさや楽しさ，有能感などを感じて，学力の向上につながりやすいと言われています。実際に，**「自分にはよいところがある」と回答した児童生徒ほど正答率が顕著に高くなっており，自己肯定感と正答率との相関**が見てとれます。一方，この質問に「当てはまる」と回答した児童生徒の割合は，令和元年度の調査と比較して，中学校はやや増えたものの，小学校は減っています。また，小・中学校ともに，**全国平均よりも大きく下回っており，Ａ県と比較すると，その差は顕著**に見られます。

国の調査結果等によると，**自己肯定感が高い方が，様々なことにチャレンジしたり，粘り強さが見られたりする**とされています。そして，何かにチャレンジしたり，最後までやり遂げたりする経験は，自己肯定感を高めることにつながります。このような観点から，**粘り強さに関する項目を見ると，本県はその数値も，全国と比較して低くなっている**ことが分かりました。

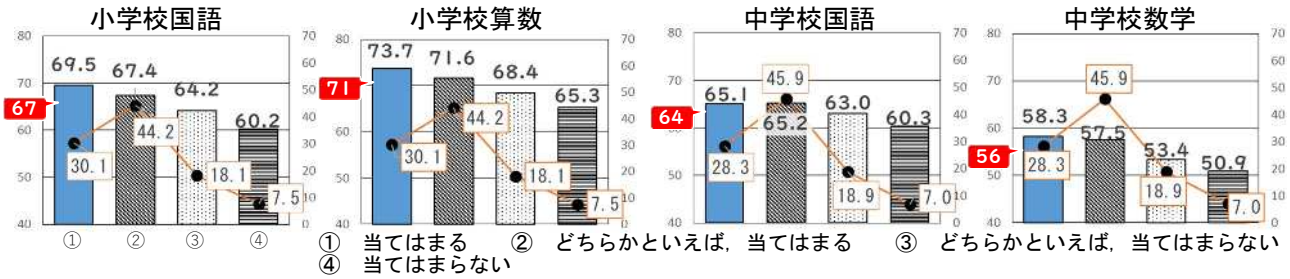
児童生徒の自己肯定感の醸成は，学校だけが責任を負うものではありませんが，児童生徒が１日の多くの時間を過ごす学校が，お互いのよい点や可能性に気付ける空間であることは，自己肯定感を高める助けになるはずです。Ａ県では，学校において，児童生徒のよい点や可能性を見付ける取組を，本県よりも積極的に行っていることが分かります。令和元年度調査（令和３年度調査では，児童生徒への質問はなし。）では，「先生は，あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という問いに「当てはまる」と回答した割合が，本県と比較すると約１６ポイント高い状況がありました。今回の調査では，本県の学校における取組は，全国平均を上回っていましたが，**今後も，教科指導にとどまらず，学校行事等の特別活動などを通して，児童生徒の自己肯定感が高まる機会を設けるとともに，児童生徒一人一人のよい点や可能性を見付け評価する取組をより積極的に行っていく**必要があります。

〔データ１〕

「自分にはよいところがあると思いますか」という問いに「当てはまる」と回答したグループと「当てはまらない」と回答したグループでは，小学校は国語で9.3ポイント，算数で8.4ポイント，中学校は国語で4.8ポイント，数学で7.4ポイントの差があります。Ａ県と比較すると，「当てはまる」と回答した割合は，小・中学校ともに10ポイント以上低くなっています。また，「どちらかといえば，当てはまらない」，「当てはまらない」と回答した児童生徒が，小学校で25.6%（3,567人），中学校で25.9%（3,326人）いることにも留意が必要です。

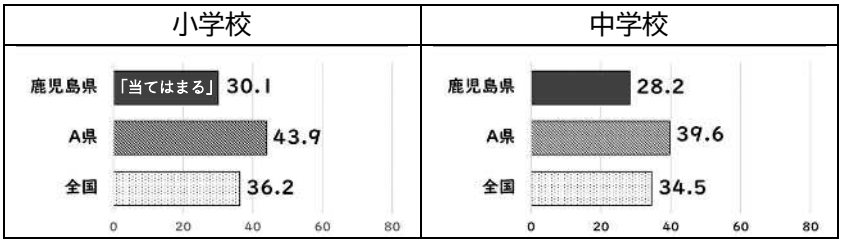
「自分でやると決めたことは，やり遂げるようにしていますか」という問いに対しては，「当てはまる」グループと「当てはまらない」グループとで，小学校は国語で12.4ポイント，算数で12.0ポイント，中学校は国語で10.8ポイント，数学で12.2ポイントの差があります。何かを最後までやり遂げる経験は，自己肯定感を高めることにつながります。まずは小さなことからでも，何かを最後までやり遂げる経験を積ませるなどの指導の工夫が求められます。

児童生徒質問紙　６	自分には，よいところがあると思いますか

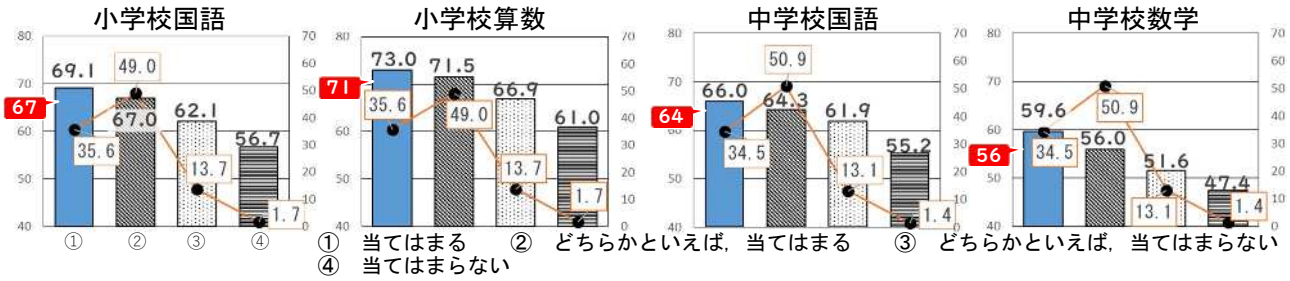


（%）

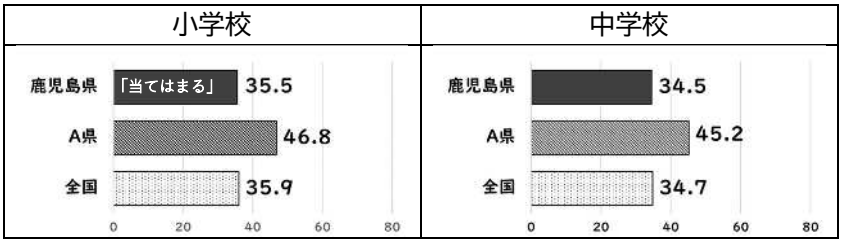
【全国及びＡ県との比較】
「当てはまる」と回答した児童生徒の割合（%）
（R元：小 33.0%，中 24.5%）



児童生徒質問紙　8	自分でやると決めたことは，やり遂げるようにしていますか



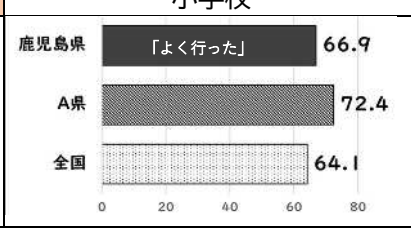
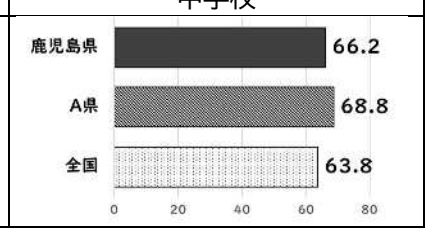
【全国及びＡ県との比較】
「当てはまる」と回答した児童生徒の割合（%）



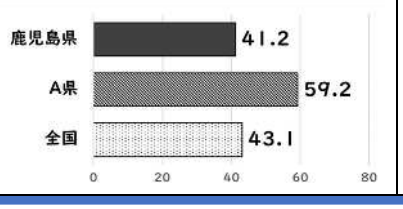
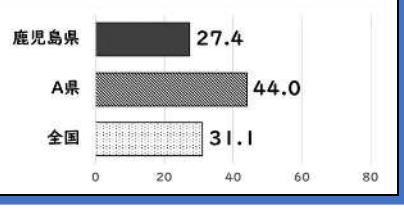
〔データ２〕

「児童生徒一人一人のよい点や可能性を見つけ評価する取組」を「よく行った」と回答した割合は，令和元年度調査と比較して，小学校で10.1ポイント，中学校で25.0ポイント増加しました。また，Ａ県と比較すると，小学校で－5.5ポイント，中学校で－2.6ポイントの差があるものの，全国平均を上回っており，各学校で高い意識をもって取り組んでいることがうかがえます。

一方，令和元年度調査では，「先生は，あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という問いに「当てはまる」と回答した割合は，学校の回答よりも10ポイント以上低く，全国平均を下回っていました。したがって，教師の働き掛けが児童生徒にどのように受け止められているかについては，常に意識する必要があります。

学校質問紙　11	小学校	中学校
児童生徒に対して，前年度までに，学校生活の中で，児童生徒一人一人のよい点や可能性を見つけ評価する（褒めるなど）取組を行いましたか（R元：小 56.8%，中 41.2%）		

【参考】H31 全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙から

質問番号６	小学校	中学校
先生は，あなたのよいところを認めてくれていると思いますか		

④　言語活動と自己表現力

言語活動を通した言語能力や自己表現力の育成は，すべての学習の基盤となります。例えば，教科書を正しく読み，理解したり，問題で問われている趣旨を理解したりするには読解力が必要です。そして，自分の考えを整理したり，他者に分かりやすく伝えたりするためには，言語による表現力が求められます。また，豊かな言語活動は，多様な価値を認め，答えのない問いに対し，他者と協働して生きていく力を育むことにもつながります。

調査結果から，言語活動に積極的に取り組むグループほど正答率が顕著に高いことが明らかになりました。そしてそれは，国語だけでなく，小学校算数，中学校数学においても，正答率との相関が見られました。しかし，積極的に取り組んだ児童生徒の割合は，全国平均よりも低い状況です。

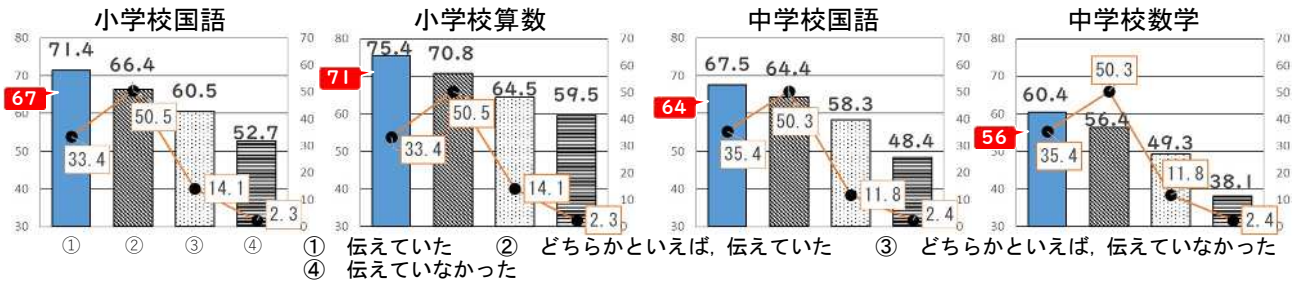
一方，話合い活動における指導について比べてみると，互いの意見のよさを生かして解決方法などを合意形成したり，話合いを生かして，一人一人の児童が意思決定したりすることができるような指導を行っている点について，Ａ県との差が大きいことが分かります。

このような資質・能力を育成する上で，特別活動，特に学級活動の果たす役割も重要ですが，小・中学校ともに取組が十分になされているとはいえない状況です。改めて校内の教育活動全体を振り返り，児童生徒があらゆる機会において，話し合う機会を積極的に設けるとともに，話合いが形式的なものになっていないか，特定の児童生徒だけが発言する場になっていないかを検証する必要があります。そして，その過程を通して児童生徒の言語能力や自己表現力を高めていく必要があります。

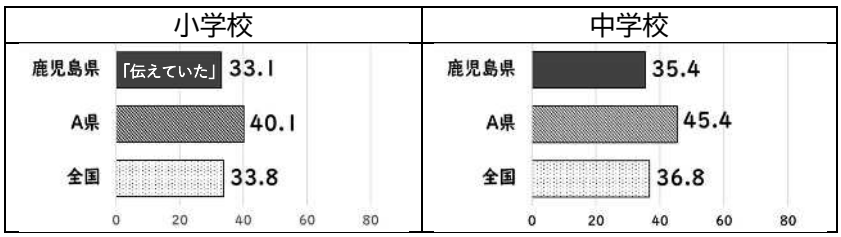
〔データ１〕

言語活動の取組状況と正答率には強い相関が見られました。特に，話合い活動で，友達の考えを受け止めて自分の考えを「伝えていた」グループと，「伝えていなかった」グループとでは，正答率に20ポイント前後の差が見られます。「伝えていた」に着目してＡ県と比較すると，小学校で－７ポイント，中学校で－10ポイントの差があります。授業では，教師の質問に対して単語や一文で答えさせるような活動だけではく，自分の考えを理由や具体例などを含めて複数の文で発言したり，まとまりのある内容の原稿を読み上げる形ではなく，メモやスライドを使うなどして，自分の言葉で伝えたりする機会を継続的に設定する必要があります。

児童生徒質問紙 31	５年生までに（１，２年のとき）受けた授業で，学級の友達との（生徒の）間で話し合う活動では，話し合う内容を理解して，相手の考えを最後まで聞き，友達の考え（自分と同じ所や違うところ）を受け止めて自分の考えを伝えていましたか



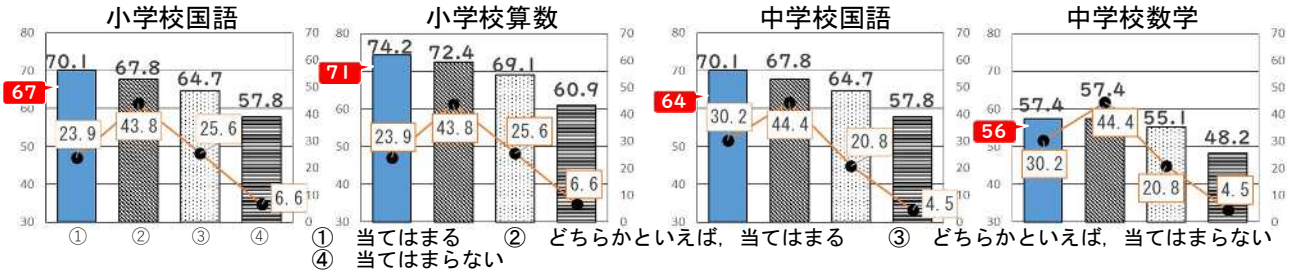
【全国及びＡ県との比較】
「伝えていた」と回答した児童生徒の割合（%）



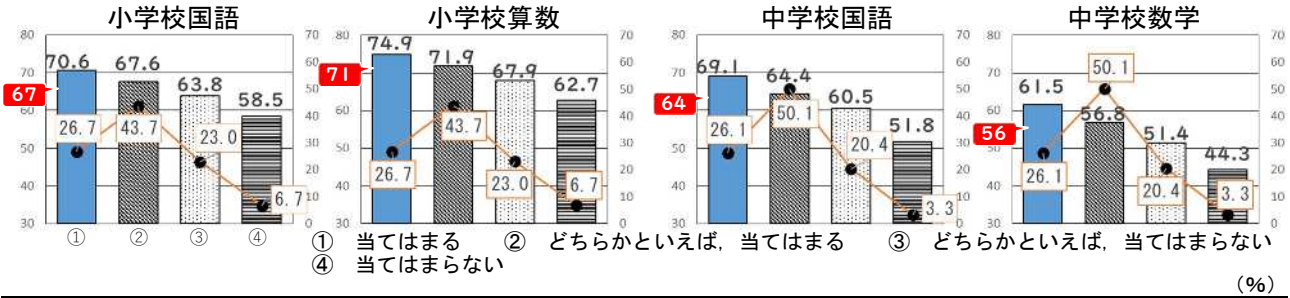
〔データ２〕

「自分の思っていることや感じていることを言葉で表すことができますか」,「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」への回答も正答率との相関が見られます。的確に分かりやすく伝えるように指導するためには，自分や伝える相手の目的や意図を捉えるようにすること，構成や表現を工夫しながら伝えられるようにすることに留意が必要です。

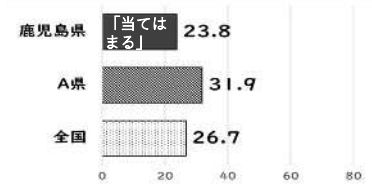
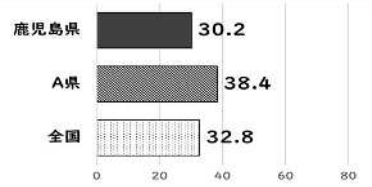
児童生徒質問紙　14	自分の思っていることや感じていることをきちんと言葉で表すことができますか

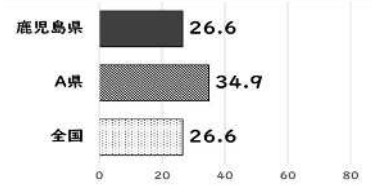
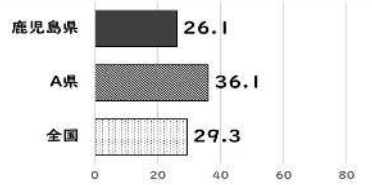


児童生徒質問紙　15	自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか



（%）

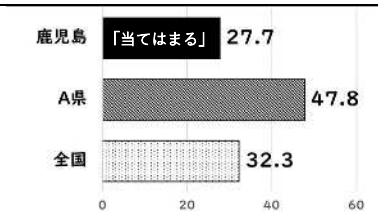
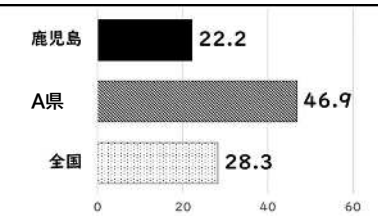
児童生徒質問紙　14	小学校	中学校
自分の思っていることや感じていることをきちんと言葉で表すことができますか		

児童生徒質問紙　15	小学校	中学校
自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか		

〔データ３〕

学級会で互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると回答している児童生徒の割合は，小・中学校でいずれも30%未満と極めて少ない状況です。Ａ県と比較すると小学校で20.1ポイント，中学校で24.7ポイント低くなっています。一人一人の教員が学級会を含む特別活動の意義を十分理解できているか，適切な活動が行えているかを検証し，改善する必要があります。

（%）

児童生徒質問紙　40	小学校	中学校
あなたの学級では，学級生活をよりよくするために学級会で話し合い，互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか		

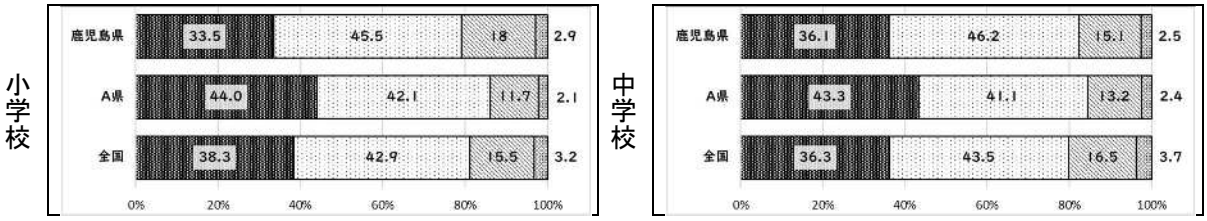
コラム　　生活習慣と学力の関係

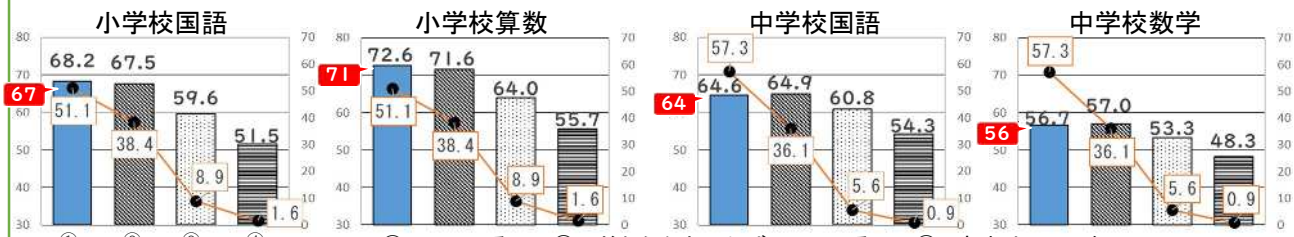
子供の心身の健康や意欲は，正しい生活習慣の下での充足感のある生活が基盤となります。「早寝・早起き・朝ごはん」などの生活習慣づくりは，「自己管理能力」を身に付けていく基礎になることも期待されます（参考：「平成30年版　子供・若者白書」内閣府）。例えば，「明日早起きするために，夜はテレビを見るのをやめて早く寝よう。」のように，自分を律し，管理し，コントロールする能力を身に付けることは，勉強面でも自分をコントロールし努力することで学力が向上するだけでなく，将来的には，健康管理，時間管理，感情の管理，お金の管理など，よりよく生活する上で必要な力も高めていきます。生活習慣の確立に向けて，以下のデータ等も参考に，保護者やPTAとも積極的に連携し，協力を得るようにしていきましょう。

【就寝時間】

就寝時間が安定している児童の割合は，小・中学校ともに全国平均を下回っています。A県と比較すると，小学校は10ポイント以上低い結果となっています。 また，「あまりしていない」，「全くしていない」と回答した小学生が20.9%，中学生が17.6%いました。心身の健康を保つだけでなく，学力向上の観点からも就寝時間についての適切な指導が求められます。

児童生徒質問紙　2	毎日，同じくらいの時刻に寝ていますか





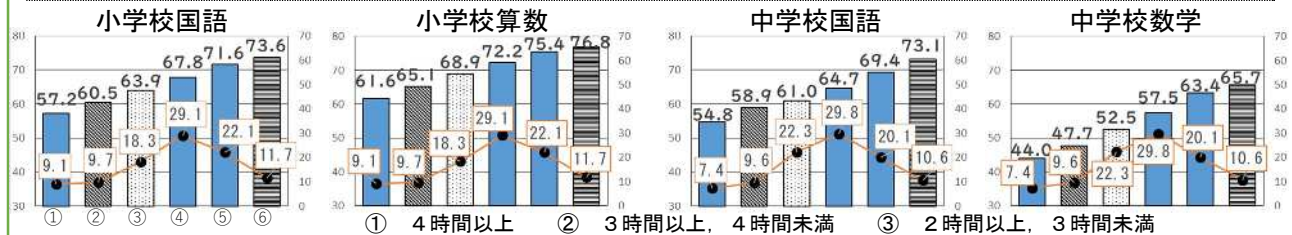
① している　② どちらかといえば，している　③ あまりしていない
④ 全くしていない

【テレビゲーム】

普段（月曜日から金曜日），1日当たり，テレビゲームをする時間が短い児童生徒の方が，教科の正答率が高い傾向が顕著に見られます。

テレビゲームをする時間として最も多かった回答は，1時間以上2時間未満でした。中学生に着目すると，2時間以上が約40%，2時間未満が約60%となっています。また，平日に毎日1時間以上テレビゲームをする小学生は全体の66.2%，中学生は69.1%にも上ります。そして，4時間以上する小学生は1,258人，中学生は952人もいる状況であり，早急な改善が必要です。

児童生徒質問紙　5	普段（月曜日から金曜日），１日当たりどれくらいの時間，テレビゲームをしますか



① ４時間以上　② ３時間以上，４時間未満　③ ２時間以上，３時間未満
④ １時間以上，２時間未満　⑤ １時間未満　⑥ 全くしない